

日本の統計学的 社会調査のはじまり

日本の統計学的社会調査のはじまりは、1947年末から準備がなされ半年ほどの準備期間をへて翌年8月に実施された「日本人の読み書き能力調査」といえよう。GHQによる占領下では、日本民主化計画で教育改革を担当したCIE(民間情報教育局)で漢字廃止・ローマ字化の計画があった。彼らは、日本人は難しい漢字を使うために読み書き能力が低く文化レベルの低さとつながっていると考え、その低さを実証し合理的に漢字廃止・ローマ字表記を採用しようとしていたのである。この調査では言語、国語、心理、教育、統計などの専門家による委員会(委員長 務台^{むたい}理作)が設けられ、母集団を15歳以上65歳未満の日本人とした全国の一般国民を対象とする初めての標本調査が実施された。科学的調査として日本語能力の定義にはじまり質問票の作成、各種の予備調査、サンプリング法と、社会調査の基本となる様々な検討がなされた。質問票は柴田武(国立国語研究所)、サンプリングは林知己夫(統計数理研究所)という、当時若手であった2人が中心となって作成し、世界に前例のない規模での調査が半年ほどの準備期間で検討された。

ここで初めて層別サンプリングが行われた。市(6大都市は区)と郡を単位として全国を層別し、各層から市か郡を人口に比例した確率で抽出(郡は更に町村単位で層別し1町村を抽出)し、各市町村から米穀配給通帳を利用して個人を等間隔に抽出した。調査地点は270市町村、合計

21,008人*が抽出された。これらの人々は学校など405の調査会場に出頭するように依頼され、合計16,820人という今では考えられないくらいの高回収率が得られた。その結果では全国平均は100点満点で78点、完全文盲は1.7%と世界諸国の文盲率と比べて著しく低く、日本人の読み書き能力は予想外に高いと評価され、GHQはローマ字を日本の国字にすることを諦めたとのことである。調査結果により日本語のローマ字化政策が中止された点だけでなく、戦後初めて科学的手続きによって実施された標本調査として、日本が世界に誇れる調査である。

この調査の話は、林知己夫先生から思い出話として直接うかがっていた。そのなかには、日本の地図のほとんどを持っており地点の抽出では大活躍された方が地図の見過ぎで目がほとんど見えなくなってしまったとか、徹夜に近い作業が1年近く続いて身体を壊してしまった方の話もあり、大変な作業だったことは確かだが、とても楽しそうに話してくださっていた顔が今でも脳裏に浮かぶ。その後、高倉節子先生からこの調査の話をうかがう機会があったが、先生もこの調査に係わった一人で、終了後数年間、体調を崩されて休職を余儀なくされたそうである。この調査の詳細は『日本人の読み書き能力調査』(東京大学出版, 1951)として本にまとめられている。社会調査士を目指す方、調査に係わっておられる方にはぜひとも読んでいただきたい。

山岡和枝

帝京大学大学院公衆衛生学研究所 教授

*刊行時は17,100人としておりましたが、正しくは21,008人の誤りでした。お詫びして訂正いたします。